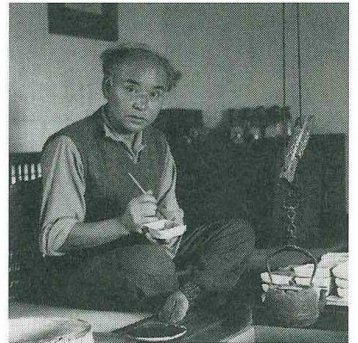


高山の文化を高めた人々 37

小糸窯復興と飛騨・高山観光の
仕掛け人 長倉三朗

鍋島 道雄



しながらも筆のスピードを落とすことなく、作品が出来上がっていくのはつい時間の経つのを忘れて見惚れるほどと言われました。

二十年ほど前、横浜市本牧の三溪園へ行ったとき、その中の重要文化財・矢筈^{やのはらけ}原家が長倉さんと関係が深いことを知りました。事務所には、まだ本人を知っている職員がいて、この調査研究は長倉先生のおかげであると感謝しておられました。その中には飛騨の民芸品も展示してあり良質なものでした。

長倉三朗さんは明治四十四年十一月二日宮大工の父・長倉源三郎、母・とみの長男として高山本町で生まれました。昭和二年斐太中学を中退し、瀬戸へ陶芸の修業に出ました。十八年間陶磁器製作の修業をし、特に絵付けの才能に優れ、陶器の上を走る筆捌きは見事なものでした。訪問者と話を

終戦となつて高山へ帰り、昭和二十一年秋、日下部礼一氏や有志の支援を受け上岡本町に登窯を作り、金森時代にあつたという小糸焼の復興を果たしました。その当時は食に追われ陶器や茶器などへの関心は薄かったので、大宮盆栽町の九霞園・村田久造（下二之町出身者）氏のアドバイスや支援を得て盆栽鉢の「泰山鉢」を作りました。今日でも希少価値があり愛好家を魅了しています。

二十六年に東京の田中ルツボを紹介されて、陶体ガラス創作の研究を始めました。これは陶器で網状や透かしの壺形を作り内側にガラスを吹き込んで作るものです。陶器とガラスは冷却時の収縮率が異

なり、一体化するには物理的に無理があります。試行錯誤のうえ完成し、二十七年に高山市内で陶体ガラス新作展を開催しています。

三十一年十月に陶器の花瓶が日展に入選しました。

三十四年五月に高山市の嘱託として飛騨民俗館の運営を託されました。

この頃、農山村の生活民具の美しさに魅せられてのめり込み、調査収集を始めています。小鳥幸男現文化協会長もたびたび調査に同道されていたようです。

庄白川方面の「櫓」「木の股」「養蚕用具」などの民具類はそれを収集しても運搬手段が無く、御母衣ダム建設のための火薬運搬の車で持ち運びました。三十五年には「飛騨の櫓」のコレクションが文化庁より重要民俗資料に指定されました。

このころから、民俗学・舞台、観光関連などのラジオ・テレビ出演が多くなり、一方で博物館や市役所関連の仕事などが忙しく、陶芸は長男の靖邦氏に継がせています。

四十年には野首家の移転建設が市議会でも否決されて予算が付かず、棟方志功・各務鉦三や高僧の墨蹟など多くの有名作家の作品を寄贈してもらい、郷土館の二階で展示即売して資金を作り建設を果たしました。

四十三年に高山市に飛騨中の特色ある民家とその付属建物を集めた民俗村構想意見書を市長に提出して認められ、「飛騨の里」建設にあたりました。突貫工事のため七カ月間工事現場に寝起きして、四十六年七月一日の開館に漕ぎ着けました。

陶芸や民俗学、屋台などに関する著書が多くありますが、ブルーガイドブックス「高山・飛騨路」は約二十万部が売れて飛騨の観光事業発展の一翼を担いました。

五十七年、民俗事業功労者として勲五等瑞宝章の叙勲に輝いています。

平成九年二月十五日、享年八十六歳で永眠されました。



陶体ガラス